

磨き作業が楽しくなる! 失敗しない 磨き術 ー試行錯誤の磨き体験記よりー

G&T社長・竹内宏の

竹内宏 (たけうちひろし)

ジーアンドティー代表取締役。1961年生まれ。1980年にマツダオート大阪へ入社し、1984年に独立し保険代理店兼中古車販売業を営む傍ら、カーディテリングに触れる。1987年に廃業し、テロソソコーポレーションのグループ会社にカーディテリングの本部社員として入社。大手カー用品店にコーティングビジネスを提案し、自らも実験店で現場作業に従事する。その後自動車補修用品の営業経験を積み、2003年に再び独立してジーアンドティーを設立。サンマイト社サンドペーパーの東日本代理店として磨き関連商品を販売しながら、講習会を積極的に開催するなどアフターケアを重視した営業手法を展開している。



[第3回] 失敗を防ぐバフの手入れと 塗り肌が整った塗膜の磨き作業

バフの手入れに 丸洗いは厳禁!

前は、バフ目やオーロラマークの出ない仕上がりを目標としたポリッシャーの選び方と、「削る」磨きと「仕上げる」磨きの違いについて解説しました。では、磨き作業を始める前に、今一度ツールを確認したいと思います。

まずは回転を調整できるシングルアクションポリッシャーとバフとコンパウンド、拭き取り用の仕上げクロスを数枚、そしてバケツに水を用意します。さらにエアダスターガンを、すぐに使えるよう準備しておいて下さい。

パネルのゴミ取りについては、それぞれの工場で方法が違ふと思いますので、細かくは説明しませんが、基本的な考え方として、できるだけ細かい番手で処理する必要があります。ゴミの

数が多かったり、クリヤーが硬い場合は粗い番手を使わざるを得ませんが、磨きと同様最初に削り過ぎず、わずかに残ったゴミ跡と、最初に入ったペーパー傷を次のやや細かい番手で同時に処理するイメージで作業することにより、後の磨き工程が楽になります。

準備が整ったらいよいよ作業開始なのですが、その前に、バフの状態をチェックします。バフが汚れていては、テクニックや材料にこだわっても、磨き傷を防ぐことはできません。

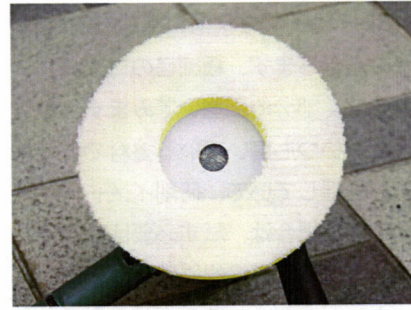
バフを清掃する際、まずウールバフなどの毛足があるタイプは、金属のブラシなどをかけると、毛が傷んで塗膜に傷が入りやすくなりますので、エアブローで清掃して下さい。使用後のエアブローを習慣にすれば、コンパウンドのこびり付きはできないはずで

もし固まったコンパウンドが取れな

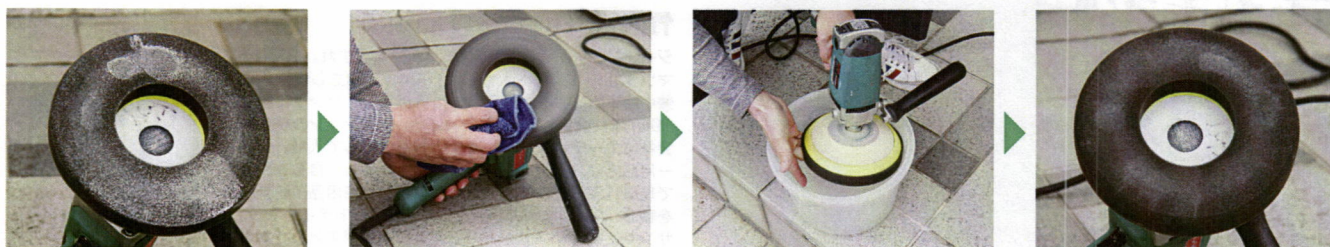
い場合は、軽く湿らせた後にプラスチック製のブラシでこすり、少し乾いたらエアブローして下さい。バフクリーニング用の振動エアガンを使えば、最も簡単にキレイになります。

たまに丸洗いする方を見ますが、土台の変形や、貼り合わせ部分のはがれの原因になりますのでNGです。ただし、生地面だけを水洗いするのはOKです。その場合は余分な水分を切って陰干して、毛足を整えて下さい。

次にスポンジバフの清掃ですが、エアブローより水洗いが良いでしょう。水洗いと言っても丸洗いしてしまうとウールバフと同様に変形しますので、濡れたタオルを軽く絞り、回転させたスポンジバフに押し当てるようにして、バフ表面のコンパウンドをこすり取ります。コンパウンドによっては、固まると水では簡単に取れない場合が



コンパウンドがこびり付いたウールバフ (左)。軽く湿らせた後にプラスチック製のブラシでこすり、少し乾かし振動エアガンなどでブローすれば (中央) 汚れが落ちる (右)



汚れたスポンジバフ（左）の清掃では、回転させた状態で濡れたタオルを軽く押し当てる（中央左）。
汚れが頑固な場合は水の中で回転させながらバフに指を当てると（中央右）表面のコンパウンドを除去できる（右）

ありますので、ウールバフと同様、早めの手入れが肝心です。

なお、サフォームや金属ブラシで表面の汚れを削り落としている方をよく見かけますが、スポンジ表面が荒れ、その後ますますコンパウンドが詰まりやすくなりますのでお勧めできません。

また、それぞれのバフの寿命ですが、ウールバフなら切れ味が落ちたり傷が入りやすくなったら、スポンジバフなら腰がなくなり適度な弾力を感じなくなったら、交換です。よく使うバフは常に数枚用意しておき、順繰りで使えばバフの寿命も長くなります。

磨く塗膜の硬さをイメージしているか？

さて、バフのコンディションに問題がなければ磨き作業開始です。

モデルケースとしてパネルの塗装は、硬化剤比率4：1～2：1のクリアーを想定してみます。塗膜はおおむね整っており、わずかな肌調整が必要な程度と仮定しましょう。皆さんならどうしますか？

ペーパー傷の状態にもよるのですが、私ならまず、極細目のコンパウンドで軽く部分的に磨いてみます。もっとも、いつも磨いている塗料で乾燥状態も把握していて、研削イメージができていない場合は、試す必要はないでしょうが……。一般的には、極細目コンパウンドで磨いた時の削れ具合で、クリアーの状態がおおよそイメージでき

ます。

ペーパー目の消え具合を見て、自分の中で硬い、やや硬い、普通で磨きやすいなどと、イメージを分類しておくとい良いでしょう。ここではやや硬いと設定します。

塗り肌が整っている塗膜は極細目主体で磨く

ゴミの数が少ない場合はまず、ペーパー目の周辺だけを細目のコンパウンドで磨きます。塗り状態が良い場合は、細目コンパウンドで全体を磨くのは無駄に傷を付けることになりますから、ピンポイントで磨きます。ミニポリッシャーがあれば、より小さい範囲で磨けるのでお勧めです。

この作業のポイントは、うまく仕上がった塗膜をできるだけ活かすことです。細目コンパウンドで磨き過ぎると、その部分の肌が落ち過ぎて目立ってしまいますから、無理にペーパー目をすべて落とそうとせず、8割程度処理できればOKです。できれば極細目コンパウンドだけで作業したいところですが、「やや硬い」想定ですから、時間短縮のために細目コンパウンドを少し活用して、極細目コンパウンドで仕上げる感覚です。

おおよそペーパー目が落ちましたら、極細目コンパウンドで残ったペーパー目を処理しつつ、先程より磨く範囲を広げて細目コンパウンドのバフ傷を消し、光沢感を整えます。ゴミのな

い部分も磨いた部分との差が出ないよう軽く磨いて下さい。この後ももう一度、極細目コンパウンドでパネル全体を均一に磨いて肌を整えます。

ここまで作業できたら水拭きして、ペーパー目は消えているか、細目コンパウンドの深いバフ目は残っていないか、肌目の荒れている所はないかなどをチェックして下さい。問題がなければ、この後はスポンジバフと超微粒子コンパウンドで仕上げます。

一連の作業のポイントは、極細目コンパウンドを主役と考え、ほぼその工程で仕上げるつもりで時間配分することです。最初の段階で肌調整がもう少し必要な状態であったなら、ピンポイントでの細目コンパウンドをもう少し控えめにして、細目コンパウンドで再度全体を均一に磨きつつ、ペーパー目を処理して下さい。その後は極細目コンパウンドで仕上げます。

なお、細目コンパウンドで塗面に足が付き、極細目コンパウンドの肌調整力が増しますので、細目コンパウンドでさほど磨き込む必要はありません。

今回は一例を挙げて簡単に工程を説明しましたが、各作業で注意すべき点があります。また、塗膜の状態やクリアーの種類が違えば工程は大幅に変わりますので、次回以降はそれぞれにおいて使用するバフやポリッシングパッド、コンパウンドの選択方法についても触れていきます。（続く）